人文学は何語で発信されるべきか

人文学の「国際化」と 21世紀中国

平田昌司

The “Internationalization” of the Humanities in Twenty-First Century China

Shoji Hirata

During the 17 years from 2003 to 2020, universities in the People’s Republic of China promoted reforms aimed at becoming “world-class” institutions and raising their position in the Times Higher Education World University Rankings. This paper outlines the impact of the so-called World-Class University reforms on humanities fields in China.

In 2003, Xu Zhi-min, president of Peking University, unveiled a World-Class University plan that introduced a performance evaluation system to judge professors’ scholarly output. Under this plan, scholars were to be evaluated numerically based on how many papers they published in certain core journals within a certain period of time. They have also been asked to improve their English proficiency, the planned criteria for promotion to full professor included the ability to teach courses in a “foreign language” (in most cases English), and a record of publishing papers at an “international standard” of scholarship. Until recently, it has been common in China to teach courses and to publish research outcomes in the humanities in Chinese-language formats. As a result of plans for “internationalization,” however, scholars—including those working in the fields of Chinese literature, history, and philosophy—have had to justify teaching their courses and publishing their research results in Chinese. Scholars now have pressure to show that their Chinese-language courses and publications meet an “international standard.” The situation in China at the 2003 start of the World-Class University reforms resembles the current situation in Japan, where Japanology is also facing demands to be “internationalized.” The arguments that have been presented for and against the pursuit of “world-class university” status and the promotion of English-language scholarship in China merit consideration in light of conditions in Japanese universities today.

In 2020, Peking University was ranked twenty-third in the Times Higher Education World University Rankings. Most courses in the fields of Humanities for Chinese students are still taught in Chinese.

はじめに

日本の大学の研究教育「国際化」は、ほぼ英語化と同義である。そして、日本の大学が「国際化＝英語化」に熱心になる動機のひとつが、Times Higher Education (THE) 世界大学ランキングの順位を上げることだという事実は、確認しておいてよいだろう。しかし、人文学とりわけ言語・文学分野は多様な言語を背景とするし、日本の人文学では日本語を用いて学問的議論をする伝統が長く

続いてきた。「国際化」の要請下に、日本の人文学ないしは日本語・日本文学研究の使用言語をどうするかが、問題にされているゆえんである。

本稿では、日本以上に長い文化的伝統を有し、人文社会科学を自国語で論じることのできる教育研究体制を100年以上かけて構築してきた中国が、21世紀の教育「国際化」にどう向き合おうとしてきたかを、日本の一中国語学者の立場から略述する。きわめて狭い視野からの紹介に過ぎないが、多少でも参考になればさいわいである。

1 中国の大学「国際化」についての2003年

中華人民共和国における大学の「国際化」は、1998年5月4日に当時の江沢民中国共産党総書記が「中国は世界先端水準の一流大学をいくつか持たねばならない」と発言したことが、重要な契機になっている。江沢民の講演から満5年を経た2003年5月、北京大学の許智宏^{シュー・ジーホン}学長（1942年生、生命科学）（図1）・張維迎^{ジャン・ウェイイン}教授（1959年生、経済学、オックスフォード大学博士）ら中枢部は、現在の北京大学の教授には国内基準で評価しても二、三流に過ぎない者さえ含まれていると認め、暗にアメリカの大学を国際標準とする「一流大学」をめざした人事制度改革草案を発表した。この草案には、既雇用の正教授の降格・解任はしないと身分保障した上での教員任期制の導入、教員の淘汰（成績優秀ではない者を、講師では1/3以

上、准教授では1/4以上を任期満了時に解雇）、研究成果の乏しい学科の解散、新しく採用する教授は（一部学科を除き）外国語で講義ができなくてはならないなど、多くの提案が含まれていた。ことがら自体は、北京大学の内部改革に過ぎない。しかし、あたかも中国の大学全体が、アメリカ標準主義、教育の市場化、管理主義へと向かって急速に動いていた状況もあって、北京大学内外ではこの改革草案をめぐる激しい論争が起きた（図2）。北京大学が改革草案を公開したことは、中国国内のかんりの大学に影響を与えざるを得ない。それは、中国の高等教育全体が、欧米型の世界大学ランキングの順位向上に向けて一斉に動き始めたことを意味する。終身雇用が必ずしも保証されなくなった若手大学教員たちは、（1）教員評価・就職活動の審査に向けて、論文数、掲載誌の格付け、論文の被引用回数といった得点を意識して研究を行わざるを得なくなったし、（2）英語論文の欧米

学術誌での発表の有無を問う雰囲気が人文学でも生じてきた。うち（1）の実績を単純明快に提示できるのは「Citation Index 引用索引」の数値で、中国の人文社会科学では、英語論文ならトムソン・ロイターのSSCI（Social Sciences Citation Index）が、中国語論文なら南京大学中国研究評価開発センターのCSSCI（Chinese Social Sciences Citation Index）¹、清華大学の学術論文データベース「中国知網CNKI」（China National Knowledge Infrastructure）などの数値が重視されるこ

図1 許智宏

1965年に北京大学生物系植物学専攻を卒業。1979年から1981年の間、英国のジョン・イネス・センター（John Innes Centre）、さらにノッティンガム大学で在外研究の経験がある。1999年から2008年まで9年間、北京大学学長を務めた。写真は北京大学新聞網による：<https://news.pku.edu.cn/xwzh/a453921dd7a943bc9ed7ad8272b7b8c4.htm>

図2 雑誌『読書』2003年第9号

北京大学をめぐる「大学改革專輯」が特集として巻頭に掲載された（執筆・発言者15名）。改革派・批判派両方が真剣に議論しており、いま読んでも充実した内容である。

	题名	作者	来源	发表时间	数据库	被引	下载
□ 21	Influence of Ancient Chinese Literati's Autumn Melancholy on the Tale of Genji Considering Computer Data Analysis Technology	Qi Na;Deng Fei	Journal of Physics: Conference Series	2020-04-01	外文期刊		
□ 22	关于《源氏物语》中“植物”意象的研究——以女性人物为视角	王堯	辽宁大学	2020-04-01	硕士	75	
□ 23	浅析日本文学作品的翻译方法——以《源氏物语》为例	孙雄燕	青年文学家	2020-03-25	期刊	19	
□ 24	The feminine voice of subversion and inversion: a comparative reading of “The Story of Yingying” and The Tale of Genji	Jindan Ni	Neohelicon	2020-03-17	外文期刊		
□ 25	从《源氏物语》看平安时代女性的悲惨命运	刘博	现代交际	2020-02-15	期刊	1	884
□ 26	女性、知识与权力——《源氏物语》中的《史记》出典研究	刘佳琪; 郭雪妮	唐都学刊	2020-01-15	期刊	425	
□ 27	《源氏物语》中六条妃子生灵出窍成因分析——基于精神分析和解构主义视角	朱慧敏	名作欣赏	2020-01-10	期刊	171	
□ 28	Yosano Akiko and The Tale of Genji	Gaye Rowley;G. G. Rowley	University of Michigan Press	2020-01-01	外文图书		
□ 29	Yosano Akiko and The Tale of Genji	Gaye Rowley, G. G. Rowley	University of Michigan Press	2020-01-01	外文图书		
□ 30	The Tale of Genji - Translating Eleventh Japanese Literature to Contemporary Western Readership		Ilha do Desterro	2019-12-30	外文期刊		
□ 31	《源氏物语》的元服与教育——以光源氏之子夕雾为例	赵晓燕	日语学习与研究	2019-12-25	期刊	125	
□ 32	白居易与紫式部文学创作观的对比研究——以《长恨歌》和《源氏物语》为例	成玉峰; 仇琦	大众文艺	2019-12-15	期刊	7	543
□ 33	简析日本花组《新源氏物语》中的“和”文化	张莉	戏剧文学	2019-12-15	期刊	99	
□ 34	日本现代景观中的传统美学特征——以佐佐木叶二作品为例	邓慧	美术大观	2019-12-15	期刊	130	
□ 35	『源氏物語』玉鬘巻の本文様態—麦生本系統を中心—	林欣慧	台灣日本語文學報	2019-12-14	外文期刊		
□ 36	从《源氏物语》看平安时代的贵族服饰文化	魏启迪; 杜冰冰	服饰导刊	2019-10-11 15:15	期刊	457	
□ 37	The Uji Chapter in the Tale of Genji and “Ate” - Those who are “Ate” and Their Characteristics -	尹勝玫	Korean Journal of Japanese Language and Literature	2019-09-30	外文期刊		
□ 38	中国語訳における和歌の特徴-巫山雲雨の故事を踏まえた和歌の分析を中心に-	笹生美貴子	International language and literature	2019-08-31	外文期刊		

図3 清華大学「中国知網CNKI」の検索結果画面

日本の国立情報学研究所CiNiiに似ているように見えるが、CNKIは60の国と地域の650以上の出版社と協定を締結し、その範囲内での外国語雑誌7万点あまり、図書100万冊の一括検索が可能という。たとえば簡体字“源氏物語”を題目に含んだ研究成果を検索すると、中国国内の研究結果にとどまらず、自動的に日本語“源氏物語”や英語“The Tale of Genji”も検索対象となって、日本・台湾・韓国・英国・アメリカ・ブラジル・インドなどの学術雑誌に掲載された日本語・英語の論文や研究書も出てくる。このような国・地域を超えた検索機能は、CiNiiにないものである。

とになる(図3)。さらに個々の論文評価にあたっては、掲載誌の優劣の格付けがあれば判断がしやすい²。人文社会科学においても、1990年代初期から始まった「コアジャーナル(核心期刊)」という格付けの雑誌にどれだけ論文を発表できたかが、教員の採用・テニュア化・業績評価といった節目ごとに、中国の研究者の生存にとって重みを増してきたのが21世紀だと言えるかもしれない。人文科学で博士学位取得後に大学教員としての就職をめざすなら、在学中にコアジャーナル以上の格付けの雑誌に論文5篇程度の発表実績がないと、教員公募に応じても採用される見込みは低いとされる。

北京大学の改革草案の中には、研究業績の数値化(およびそれにともなう英語重視)以外にもう一点、人文社会科学にとって無視できないことが記されていた。大学教員の外国語での講義能力である。

2 人文社会科学の教育研究に 外国語(英語)は必要とされるのか

2003年の北京大学人事制度改革草案のうち、大学中枢部が当初予期しなかったほどの批判を浴びた条項が「新しく採用する教授は(一部の学科を除き)外国語で講義ができなくてはならない」である。外国語による講義には、学生の質問への対応、自由な討論の主導、提出課題へのコメント、成績評価まで求められる。海外の博士学位を優秀な成績で取得した候補者でないと、この条項にかなうことは容易でない。そのため、とりわけ中国言語・文学、中国史、中国思想といった、中国人学生の母語中国語で教育研究を行い、北京大学が全国的・世界的にみても優れた水準にある学問分野の教員からの反発は強かった。当時、改革を批判する立場の研究者がよく引用したのが、台湾大学・UCバークレー・香港科技大学での豊富な教育・管理

経験をもつ丁邦新^{ディン・バンシン}(1936年生、中国語学、ワシントン大学博士)が、2000年に香港の高等教育について論じたエッセイ³である。そこでは、自然科学にとって英語が世界語で、英語で論文を書くのは自然であることを認める。つぎに、人文社会科学の研究には地域性があることを肯定し、中国語の学術誌を基軸とした評価基準作成を作るべきであること、人文社会科学の論文が中国語で書かれることの正当性を明確にすべきであると主張していた。丁氏の論は、香港の一部大学が、たとえ中国語を母語とする学生を対象とした中国文化を扱う講義であっても英語化を徹底させようとしていた状況を背景として書かれたものである。改革草案中の「外国語講義」条項は、北京大学の教育研究の香港型への転換をめざしているのではないかという疑いが、批判派の一部からは示された。これに対して、改革草案の作成に参加した李強^{リー・チアン}(1953年生、西洋政治思想史、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン博士)は以下のように反論している。「外国語講義」条項は、北京大学の授業全体の英語化を意図するものではない。中国文学・中国史などの授業を外国語でするべきではないし、自分が開講している西洋政治思想史の授業も中国語で行うべきもので、それにより母語での学生との自然な交流、西欧の理念の中国への導入をはかることができる。しかし、北京大学の教員が海外に赴いて講義・講演を行う場合、英語でなくてはならないことが普通だろう。短期の外国人留学生に講義をする場合も英語が必要になる。さらに、中国人による中国研究の分析を深めていくには、西洋の優れた中国学者、西洋の人文社会科学一般を参照系としてみるべきであろう、と。中国人が中国研究をするときでも、外国の研究を知るべきだという意見は、清華大学の孫立平^{スン・リーピン}(1955年生、社会学)も述べている。孫氏は、学問の共同体における中国研究は、具体的対象を扱った研究成果だけでな

く、理論・方法面での貢献によっても評価されなくてはならない、たとえばフランスのアナール学派が評価されるのは、彼らのフランス史研究の成果によってではなく、歴史家のものの見方を変えたことにこそあると強調し、たとえ中国人自身による中国研究であっても、外国語の能力、外部の視点から自文化圏をとらえなおすことは必要だと認めている。最終的に、賛成・反対双方によるやりとりを受けて、2003年6月に北京大学の改革草案第2稿が発表されたとき、「外国語講義」条項は表面的に姿を消した。

ここで、日本の中国語学研究者としての感想をばさみたい。外国人として中国を研究するとき、中国語で論文を書くと、想定できる読者数は日本語で書く場合に比べ10倍以上になる。また、各国の中国研究者は一般的に中国語ができるので、国境を超えた意見交換が迅速にできる。ただし、日本人が中国を対象として、中国語だけで語り書くことには欠点もある。まず、中国文化圏の読者を想定して中国語で論文を書くと、「内からの視点」を装い、母語話者にとって自明のことは省略し、中国の学界主流の語り方を真似する誘惑にかられる。そのほうが書きやすいからである。しかし、中国語圏の既成の型どおりに巧みに書けるだけで、「外からの視点」の着想を説得的に語れなくなると、「世界に中国人研究者がひとり増えただけ」という結果になる可能性がある。もうひとつ困る場面は、中国語のできない研究者を交え、中国という地域を超えた話題を取り上げるときで、可能性のある共通言語は英語しかない。あたりまえのことながら、中国研究における英語使用は、地域を超えて普遍的な位置からの分析をできるかどうかに関わってくる。中国の研究型大学で博士学位を取得した現在の中国人研究者は、入学・学位取得に際して一定の英語能力基準を満たすよう求められているため、英語でのコミュニケーション能力

は概して一定水準を超える。さらに多言語を駆使する中国人の中国学研究者もいる。こうした現状を、日本の日本学や中国学は意識しておいてもいい。つけくわえておけば、北京大学で中国人学生向けに開講されている人文系科目は、いまでも中国語を使用している。

おわりに ―2003年から2020年への17年

さて、2003年の人事制度改革の提案にあたり、北京大学中枢部は、「一流大学」になるまで17年を要するという計算結果を出していた。17年を経た2020年9月に公表されたTHE世界大学ランキング2021で北京大学は世界23位、アジアの大学として初の世界トップ20位入りを果たした清華大学に次ぐ位置にある。ほぼ期待どおりの結果になったと言えるのではないか。だが、同じ2020年の11月23日、元武漢大学学長^{リウ・ダオユー}の劉道玉（1933年生、化学）が「“一流大学”の浮誇と浮躁」というエッセイを発表した。「浮誇」とはうわついた誇大性、「浮躁」とは地に足のつかないはしゃぎかた。劉氏は、中国の「一流大学」のトップ清華大学が企業へと転型をとげ、理念を失い、産業化・行政化の方向に進んでいると厳しく警告し、オリジナルな基礎理論研究の重視、学派の形成、百年千年と読み継がれる古典的著作の創造を求めている⁴。優れた研究成果が中国で活発に生み出されつつある一方で、劉氏のように学術の腐敗を批判する声は、しばしば耳にする。2003年の大学改革論争において、北京大学教授^{タン・シアオフォン}の唐曉峰（1948年生、歴史地理学、シラキウス大学博士）は、著作の総字数・資金獲得額・英語論文数・受賞状況・メディア露出度ばかりを比べようとする現状を変える有効な方策なしで、いきなり競争原理を導入すれば混乱を招くと予告していた。17年を経て振り返ると、唐曉峰の危惧が完全な杞憂だったとは言えない。

数値目標の過度の重視の弊害には、中国政府も気づいているらしい。2020年2月18日、中国政府教育部・科技部は、トムソン・ロイターの自然科学論文引用索引SCI偏重を避けた新しい研究評価のありかたを検討するよう各大学に通知した⁵。英国の高等教育専門オンライン週刊紙 *University World News* はこの通知に敏感に反応し、中国のSCI離れについての評論を複数編掲載している。さらに翌月3月3日、人文社会科学にも自然科学同様の研究評価のゆがみがあるとする中国人民大学教授徐擁軍^{シュー・ヨンチュン}（1975年生、アーカイブ研究）の論説が新聞『新京報』に掲載された⁶。そこには、(1) 中国の現状は、人文社会科学もSSCIやCSSCIなど引用索引の数値ばかりを気にし、研究の初心を忘れている；(2) 英語による論文発表を過度に重視する「自己植民地化」傾向がみられる；(3) 数十年を経た古い論文でも価値を持つ人文学の特質が、短期の評価サイクルでは把握できない；(4) 数値目標を達成しにくい研究分野を若い研究者が避ける；(5) 数値目標至上主義が、人文社会科学を世俗化・功利主義化に向かわせた、といった批判が並んでいる。2020年2月18日通知に呼応したこの意見が、その後中国の人文学にも波及してはいないか、2021年1月、北京大学のある教授に状況を確認してみた。その返信によれば、人文学分野への影響はまだほとんどない。それはコアジャーナル掲載論文数の多寡に代替できる研究評価基準が真の意味で確立されていないからである。ただし、北京大学で中国近代文学を専門とする博士課程大学院生の場合、従来は最低2篇の研究論文が正規学術誌に発表されていないと学位審査を受けられなかったのが、半年まえから1篇へと数値目標が軽減されたという（2021年1月現在）。

引用索引依存の弊害を打破できる評価のありかたを今後中国がうまく作りだせるのか、それとも欧米中心の評価体系に対抗する「民族文化」中心主

PROFILE

平田昌司 (ひらた しょうじ)

・元京都大学大学院文学研究科教授

専門

中国語学

義が強化されるだけなのか、筆者にはまだ見通しがない。

注釈

- 1 CSSCI（中国社会科学引文索引）は2000年から正式開始。2019～2020年版では人文社会科学の中国大陸の定期刊行物568誌（うち言語関係24誌、外国文学6誌、中国文学18誌）の論文を採録している。<http://cssci.nju.edu.cn/>
- 2 たとえば、2017年7月に再編・設置された中国社会科学評価研究院は、中国国内の学術雑誌を分野ごとに「トップ（頂級）」―「権威的（権威）」―「重要（重要）」―「コア（核心）」―「拡張（拡張）」―「雑誌データベース採録対象（入庫）」―「それ以下」という階層構造で格付けし、雑誌評価は5年ごとの実績で見直すこととしている。同院設置以前の状況については、以下に詳しい。狩野修二「中国における雑誌評価―人文社会科学系雑誌の核心期刊と来源期刊―」2016年（http://www.ide.go.jp/library/Japanese/Publish/Download/Report/2015/pdf/C40_all.pdf）、澤田裕子・狩野修二「中国の研究力を可視化する―国内学術文献データベースの発展と取り組み」（アジ研ワールドトレンド259、2017年。<http://hdl.handle.net/2344/00048891>）。
- 3 丁邦新《香港教育何去何從（香港の教育はどこへ向かい、なにをするか）》、《明報》2000年2月14～15日。
- 4 劉道玉《“一流大学”的浮夸和浮躁（“一流大学”の誇大性と浮かれ騒ぎ）》、《中国新聞周刊》第973期。<https://news.sina.com.cn/c/2020-11-24/doc-iznctke2952116.shtml>
- 5 http://www.moe.gov.cn/srcsite/A16/moe_784/202002/t20200223_423334.html
- 6 《SSCI、CSSCI崇拜也須尽快破除（SSCI、CSSCI崇拜も早急に打破せよ）》、《新京報》2020年3月3日。